

令和5年度子供・若者育成支援強調月間
第39回 東伊豆町青少年主張発表大会

発表文集

と き：令和5年11月18日(土)
9時30分～12時00分
ところ：東伊豆町役場1階 大会議室
発表者：町内小中学生の代表、町内在住の高校生

主 催：東 伊 豆 町
東伊豆町教育委員会
東伊豆町青少年健全育成会
後 援：東伊豆町PTA連絡協議会
東伊豆町青少年問題協議会
協 力：稲取高等学校ボランティア部

静岡県青少年対策本部長／静岡県青少年育成会議会長
静岡県知事 川勝 平太

本日、ここ東伊豆町において、令和5年度子供・若者育成支援推進強調月間第39回東伊豆町青少年主張発表大会が開催されますことを心からお慶び申し上げます。また、日頃から、子供・若者の健全育成や支援活動に積極的に取り組まれている皆様の御尽力に対し、改めて感謝申し上げます。

本県では、「富国有徳の美しい“ふじのくに”づくり」を県政の基本理念に掲げ、幸せを実感するための基盤となる「誰一人取り残さない教育の実現」に向けて取り組んでいます。とりわけ、子供や若者の健やかな成長は、県民の願いであり、子供や若者が「生きる道」を見出し、「有徳の人」として歩めるよう、適切な支援を行うことが重要です。そのために、「地域の子供は地域の大人が育てる」という決意の下、家庭・学校・地域・職場がそれぞれの役割を果たし、連携を深め、互いに学び、支え合う教育を推進しています。

子供・若者の置かれている環境は、少子・高齢化の進行やデジタル化の急速な進展などにより、日々変化し複雑化しています。例えば、コロナ禍の3年間で、オンラインによる学習や交流が頻繁に行われるようになるなど、利便性が向上しました。一方、アフターコロナにおいて取り組まなければならない課題として、体験活動の減少や孤独・孤立の問題、SNSに起因するトラブルの発生などが挙げられています。そして引き続き、ニートやひきこもり、不登校、貧困、児童虐待、ヤングケアラーなど、様々な問題を抱えた子供や若者への支援も推進していく必要があります。

こうした課題に対応するため、県では「ふじのくに若い翼プラン—第4期静岡県子ども・若者計画—」の下、子供たちの成長と自立に向けた支援はもとより、困難を有する子供や若者、その家族への支援、さらには、子供が安心して生活できる環境、地域づくりを推進しています。

取り巻く環境の多様化が進み、社会の変化に対応する力が求められている今だからこそ、“ふじのくに”の若人が「生き抜く力」を身に付け、夢に向かって自らの翼で羽ばたいていけるよう、県や市町のみならず、地域住民団体等が連携・協力し合い、一体となって取り組むことが重要です。まさに地域ぐるみ・社会総がかりの教育が求められています。全ての子供・若者が、かけがえのない存在として誇りと自覚を持ち、「有徳の人」に成長していくために、引き続き、育成支援活動に携わる皆様をはじめ、県民の皆様の御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本大会を契機に、県内各地において社会総がかりの子供・若者育成支援活動が、ますます活発に展開されますことを祈念し、メッセージといたします。

第39回 東伊豆町青少年主張発表大会 目次

1. 開会のことば 東伊豆町教育委員 山田 知佳

2. あいさつ 東伊豆町長 岩井 茂樹

3. 発表

☆小学生の部

- ・みんなが笑顔でいられるために … 熱川小学校 6年 笠井 舞花 (P.1)
- ・子供達の居場所 … 稲取小学校 6年 嘉瀬 琴葉 (P.2)

☆中学生の部

- ・未来のために … 熱川中学校 3年 船山 明日香 (P.3)
- ・人と命のつながり … 稲取中学校 3年 藤邊 妙果 (P.4)

☆高校生の部

- ・人のためにがんばること … 稲取高等学校 1年 山崎 莉々亜 (P.5)
- ・柔道で学んだこと … 下田高等学校 1年 田代 龍輝 (P.7)

☆歴代発表者 (P.9～P.16)

4. 講評 東伊豆町教育長 横山 尋司

5. 賞状及び記念品授与 東伊豆町長 岩井 茂樹

6. 閉会のことば 東伊豆町青少年健全育成会
稲取地区連絡協議会会長 前田 和夫

みんなが笑顔でいられるために 熱川小学校 6年 笠井 舞花

みなさんは、自殺という言葉を知って何を思い浮かべますか？きっと、自殺する人は孤独だったんだろうとか、何か辛いことがあったんだろうなどと考える人がほとんどではないでしょうか。現在、我が国の自殺者数は、世界でもトップクラスに多いことが分かっています。初めてこのデータを見たとき、驚きました。近年は、全体的に減少傾向であるというデータもあり、少し胸をなで下ろしましたが、データの続きを見てみると、小学校中学年から大学一年生までの十歳から十九歳は、自殺者数が毎年減ることなく横ばいの状態が何年も続いていることが分かりました。このような事実から、私たちのような青少年が自ら死を選ばなければならない状況とは何なのか、どうしたら防ぐことができるのかを考えてみたいと思いました。

私がこのような話題に興味をもったきっかけは、夏休みに読んだ一冊の本でした。この本の中にも、死を選ばなければならない状況のヒントがありました。この本は、クラス中からいじめを受ける女の子とその幼なじみ達を描いた物語でした。女の子は、いじめにあっていることを自分の弱さにとらえ、幼なじみや家族に伝えることができませんでした。その結果、自殺未遂をしてしまいました。日本人は特に、人に迷惑をかけてはいけない、弱さを見せることは良くないことだ、という考え方が強いと思います。皆さんは、どうでしょうか。実際に私は、学校で嫌なことがあっても、両親を心配させたくないと、伝えることをやめた経験があります。しかし、困ったことや嫌なことは、だれかに伝えなければ解決したり、気分を変えたりすることは不可能だと思います。この「人に迷惑をかけない」という考え方が、困っていることを伝えられない、自分の気持ちを抱え込んでしまう状況を作り出す一つの原因だと感じました。

一方で、幼なじみ達は女の子の変化に気付いていながら、声をかけられなかったことを後悔する場面が描かれていました。この場面からも、

言葉で伝えることの大切さがひしひしと伝わってきました。

私はこの本を読んで、自殺を防いでいくためには、気持ちを言葉で伝えることが一番大切なのではないかと思うようになりました。

言葉で伝えることの大切さを実感した場面は、学校生活の中にもありました。私は、熱川小学校の前期児童会執行部として活動をしてきました。その活動の中で力を入れていたのが「あいさつ」です。あいさつスタンプラリーやあいさつハイタッチなど、全校で楽しめるように企画しました。ただ、企画を考えただけでは全校に広めることはできません。全校にどう伝えるかが問題でした。まず、どうして企画をするのか、どんなあいさつをして欲しいのかを考えました。そして、全学年が理解できるように、難しい言葉を控えて放送したり、低学年の教室には出向いて話をしたりと工夫して伝えました。すると、企画にたくさんの方が参加してくれるようになりました。また、あいさつの声や表情がすごく明るい感じになりました。その様子を見て、上手に伝わって良かったと感じました。伝え方を工夫することで、相手への響き方が変わることを実感できました。

言葉は、伝える人がいれば受け取る人もいます。私のクラスでは、ときどき会話に「きもい」や「うざい」などの暴言が出てきます。もちろん、言葉を発している人はふざけて、表情もニコニコしているので、みんな笑って終わらせることが多いです。私もその中の一人です。しかし、改めて言葉で伝えることを考えていると、このままでいいのだろうかという気持ちが湧いてきました。周りの人もみんな笑っているから大丈夫、誰も傷ついていないと、自信をもって言うことができるでしょうか。人の心の中をのぞくことは、どんなに技術が発達してもできません。だからこそ、相手への伝わり方を考えて、誰かが傷つくような言葉を減らしていくべきだと思います。私はそのために、まずは自分自身の言葉遣いを見直したり、身近な人との会話の中で声かけをしたりしていきたいと思っています。

一人一人が、伝えること、伝え方を工夫する

こと、伝わり方を考えること、この三つをしっかり意識していけば、みんなが笑顔でいられる時間は今よりずっと長くなると思います。そして、最初に話した自殺者数も減っていくのではないかと思います。ぜひ、みなさんも改めて言葉について考えてみてはいかがでしょうか。



子供達の居場所

稲取小学校 6年 嘉瀬 琴葉

みなさんは楽しく学校に通っていますか。私は毎日楽しく学校に通っています。学校は、子供が毎日通う場所です。だからこそ、私たち子供にとって学校で起きるいろいろな出来事は、とても大きいことです。学校で楽しい出来事があれば、いつもより勉強やお手伝いなどを学校でも家でもがんばろうという気持ちになります。反対に、学校でいやなことや悲しいことがあったら、いろいろなことへのやる気がなくなってしまいます。私の場合は、嫌なことがあるとゲームなどの好きなことをして忘れようとしたり、気を紛らわせようとしたりして逃げてしまいます。でも、本当は気を紛らわせたり、忘れようとしたりせずに、そういった悩みや不安を気軽に話せるような場所が学校以外にもあるといいなと思っています。

私は、夏休みにある映画を観ました。その映画は、学校でいやなことがあって学校に行けなくなってしまった子供達が、学校以外に自分の居場所ができて、少しずつ学校に通えるようになっていくというお話です。

その映画を観て、私は、子供が自分の居場所がないと感じることはとても辛いことだと思いました。そして、私が最近ニュースで観た、家

に帰らず夜に街でうろついている子供達は、学校にも家にも居場所がなく、映画に出てきた子供達と同じように辛い気持ちなのかなと思いました。もし、夜の街に子供が出て歩いていたら、犯罪に巻き込まれる可能性が高く、とても危険です。子供達がそんな思いをしないためにも、もっと子供達のための居場所があったらいいのにとと思うようになりました。

去年の静岡県の小学生の不登校の子供の数は、約二千六百人もいるそうです。この数は全国でも十番目に多い数で、平成二十八年度から増え続けているそうです。これは、一クラスに不登校の子が一人か二人はいる計算になります。その原因を調べてみると、親から離れることへの不安や環境の変化、いじめや人間関係、勉強が分からないなど、いろいろな理由があることが分かりました。そして、何よりそのことを親に知られたくなかったり、迷惑を掛けたくなかったりすることが理由で、相談できずに悩んでしまっている子も多くいるそうです。親など、近い存在だからこそ話しにくいと思う人もいるのだと思います。そのため、気軽に立ち寄れたり、話が出来たりする場所が大切だと改めて思いました。

私は、小学校一年生の時に横浜から稲取に引っ越してきました。その時、横浜と稲取の違いについて思ったことがあります。それは、横浜は、子供のための遊ぶ場所や学ぶための施設、学校などが多くありますが、稲取は、学校が小学校、中学校、高校が一枚ずつしかなく、遊び場など、子供の居場所となるような施設はほとんどないということです。

稲取に引っ越してきて間もない頃、私は、友達に誘われていくことができず、さみしい思いをしていました。そんな時に、私はお母さんにミニミニ図書館に連れて行ってもらいました。ミニミニ図書館は、稲取小学校の体育館横にあった本を借りることができる施設です。町の図書館のように広くはありませんが、本がたくさん置いてあって、気軽に本を借りることができるので、私にとっては楽しい場所でした。何度か通っているうちに、そこで働いている図書館

司書の方が私の名前を覚えてくれていろいろ話しかけてくれたので、うれしくて大好きな場所でした。しかし、私が小学校二年生の時に、このミニミニ図書館は突然閉館してしまいました。急に大好きな場所がなくなってしまったので、私はとてもショックでした。この経験から私は、小さな場所でも居場所があるということは、とても大きな意味があることだと思いました。

今、稲取には子供達の居場所となる所がとても少ないです。子供達の居場所が増えれば子供達も頼れる場所があって安心することができると思います。今年の夏休みに、去年閉園した稲取幼稚園を「夏休み宿題早めにかたづけ隊」として期間限定で解放してくれたことがありました。そのような場所を作ってくれることは、私たちにとってとても嬉しいことです。でも、期間限定ではなく、先ほどのミニミニ図書館のように、放課後などいつでも気軽に立ち寄れるような場所だったり、年れいや性別関係なく話したりできる場所があるといいと思います。また、子供だけでも入ることが出来たり、小学生でも一人で歩いて行けたりするような場所だったら、子供にとっては、さらにいいことだと思いました。

このように気軽にいつでも立ち寄って話することができる場所、子供が安心できる居場所を作るとはとても大切なことだと思います。それにより、不登校や非行に走る子、犯罪に巻き込まれてしまう子も減っていくのではないかと思います。ぜひ稲取にもこのような場所を作ってもらえると嬉しいです。



未来のために

熱川中学校3年 船山 明日香

私は将来本に携わる職業に就きたいと思っています。本に携わる職業には小説家や絵本作家、編集や出版・印刷などがありますが、私はその中でも図書館司書になりたいと思っています。図書館司書の仕事は、都道府県や市町村などで仕事の内容は変わりますが、主に図書館資料の選択、発注及び受け入れから、分類、目録作成、貸出業務、読書案内などを行うことです。その中に、男女の差が生まれるようなものは何一つありません。強いて言えば、資料や本などを運ぶときに、男性は女性よりも力が強く体力があるので、男性の方が感謝されるくらいだと思います。ですが、平成二十七年度社会教育調査によると公共図書館の女性司書の割合は約八十八パーセントだそうです。なぜ性別によって難易度が変わるわけでもないのにこのような差があるのでしょうか。

私は夏休み中に自分が住んでいる町の図書館で行われた『図書館のお仕事体験』というイベントに参加しました。そこでは図書館の普段は立ち入り禁止の場所で見ることのできない設備を見たり、実際に図書館司書が行っている業務の一部を体験したりしました。業務はたくさんの種類の新聞を新聞名ごとに分けて日付順に整頓して並べたり、移動書庫を動かしたりなどの力仕事や、読み聞かせなどを体験したりしました。私はこれらの体験から男女の人数差ができた理由を二つ考えました。

一つ目は利用者の声のかけやすさです。私の住んでいる町の図書館の利用者は、子供とその母親や父親が多いです。子供たちには男性より女性の方が話しかけやすいのだと思います。子供の対応は女性の方が安心してまかせることができるのかもしれませんが、保護者などの周りの人たちが、「児童担当は女性であるべき」と無意識に考えている、または思い込こんでいるのかもしれませんが。

二つ目は給料についてです。図書館司書の年収は約三百万円で四十歳ほどまで続けると五百

万円ほどで、すべての職業の平均が約四百五十万円なのに対して、百五十万円ほど低いそうです。四十歳ほどまで続けなければ平均よりもかなり低いというのは、男性の意識の中であまり良いと感じられないのかもしれませんが。また、正規雇用にならないと三百万円よりも年収が低くなるため、他の職業よりも安定して働くことが難しいことが分かります。たとえ職場で歓迎されるとしても、給料が低かったり安定しなかったりするのなら辞めてしまうでしょうし、そもそも選ばないでしょう。そのためでしょうか、普段利用するときにも『お仕事体験』の時にも男性職員は館長以外おらず、建物内にある役場の支所にしか男性職員はいませんでした。

これらのことから、給料などの面からも男性にはあまり向かない職業となっている上に、保護者などの周りの人からの男女差別につながるような無意識な考え方や思い込みが加わり、男性の就職率が低くなり、男性司書の割合が女性司書に対して一割程度になったのではと考えました。

調べた結果によると、図書館司書のように保育士や看護師などの職業の男性の割合は一割以下、大工や消防士などの職業の女性の割合は一割以下となっています。それはやはり、「この職業は女性が、あの職業は男性がやるべきだ」といった無意識な考えや思い込みをしていることが原因だと考えられます。

今、世界では男女差別が問題となっていて、私のような学生にも考えられるほど広まっています。なりたい職業に就くことは子供たちの夢であり目標です。大人たちはその子供たちが夢見る職業の幅を思いこみから狭めているのではないのでしょうか。今を生きる大人たちだけではなく未来を生きる子供たちのためにも、思い込みに気づき、考えや認識を変えていくべきではないのでしょうか。



人と命のつながり

稲取中学校3年 藤邊 妙果

「命を大切に」

みなさんはこの言葉を何度もきいたことがあるのではないのでしょうか。この言葉には、多くの人が賛成すると思います。

では、なぜ命を大切にすることが必要なのでしょう。このことについて、私の身の回りで起きたことから、自分なりに考えてみることにしました。

私は命の大切さについてかなり理解している方だと思っていました。なぜなら、母が助産師であり、自宅がお寺のため、生まれる命と亡くなる命の両方を間近で感じる人が多いからです。しかし、最近身の回りで様々なことが起こりました。そのようなできごとから、改めて考えさせられたことがいくつかあります。

一つ目のできごとは、姉妹の事故です。その姉妹は大学生で、九州にいました、そのため、事故にあったことは父から聞いたのですが、事故に遭った姿の姉妹をみることもなく実感が沸かなかったため、初めは重く考えていませんでした。ですが、母親から話を詳しく聞き、事の重大さを知りました。そのとき私の頭はパニックで真っ白になりました。悲しみと同時に「なぜそのようなことが起きたのか」という疑問も浮かんできました。だんだん状況が飲み込めてくると、不安が押し寄せてきました。それは今までに感じたことのない感覚でした。

もしかしたら姉妹の姿をもうみることができないのかもしれないという思い、私はその姿を見て状況を知ることができないという思いなど、考えれば考えるほど不安になりました。無事に退院ができたときに、私はようやく安心できました。そのときに、姉妹のことをここまで心配していたことに気づき、驚きました。今考えてみると、あのとき家族を失ってしまうかもしれないという状況を体験したことで、命を失うことがこれほどまでに辛いのだということを実感できたのだと思います。

私は母の「自分一人の命ではない」という言

葉をよく思い出します。この言葉は、「たくさんの人が、その人を思っているから、その人の命は一人の命ではない」という意味で、母の教えてくれたこの言葉とその意味を大切にしています。今回のことで、家族はたくさんの人に思われていること、そして私もたくさんの人に思われているということを感じました。

二つ目のできごとは、私の叔父の葬儀でのことです。最後のお別れのときに、亡くなった方の母親は、ただただ「ありがとう」という言葉を繰り返しかけていました。私は、その言葉を聞いて、いつも聞く「ありがとう」とは何か違う気がして、葬儀が終わった後にも、頭の中に残り続けました。このような違和感を覚える理由が分かりませんでした。きっと自分よりも先に命を失ってしまった子供を見た親の悲しみは、子供の私にはとうてい見当のつくものではなく、計り知れない悲しみがそこにはあるのだろうと思っていました。ですが、それだけでは、なぜ「ありがとう」なのか分かりません。今考えてみると、一つの思いが浮かびました。親子はこれまで暮らしていく上で、たくさんの出来事があったと思います。楽しい思い出ばかりではなく、時には衝突したこともあったと思います。でも最後にはそのような事も全て含めて、感謝に変わるのだろう、全ての思いを一言で表した言葉が「ありがとう」だったのだろうと思いました。私は「ありがとう」の言葉に、その人がどれだけ思われてきたのか、命を大切にされてきたのかを感じることができました。

三つ目のできごとは、生後一ヶ月の赤ちゃんが家に来たことです。その赤ちゃんは、母親とともに産後ケアで家に来ました。その母親は外国の方だったこともあり、コミュニケーションを取るときには互いに苦勞をしましたが、一緒に食事をしたり、赤ちゃんのことを教えたりしているうちに、打ち解けることができました。そのため、もっと家に居て欲しいと思うようになりました。二人が故郷へ帰るときはとても寂しく感じました。短期間のできごとでしたが、二人のことはずっと忘れたいと思います。私は

この経験からあることを感じました。それは人と人とのつながりについてです。つながりという言葉をよく聞きますが、私は関わりのある人というくらいにしか捉えていませんでした。ですが、関わりというのはどのようなものを指すのでしょうか。私は、そこに想いがあると思います。私はあの二人のことを今も大切に想っています。赤ちゃんはまだ記憶があるか分かりませんが、赤ちゃんの母親は私のことを覚えていてくれるかもしれません。このように誰かが誰かを想ってくれている。この想いが人と人とのつながりや関係をつくるものになっているのだと気づきました。

私は、この三つのできごとから命の大切さや人と人とのつながりについて、様々な角度から考えることができました。命は人と人との関わりやつながりによって、より大切に感じるものだと思います。だからこそ、人とのつながりの中に存在する自分の命を大切にしなければならぬということも理解できました。自分が他の人のことを想い、命を大切に想うように、周りからも大切に想われている私の命。人々のつながりの中に存在して一つ一つの命を私は大切にしていきたいです。



人のためにがんばること 稲取高等学校1年 山崎 莉々亜

「ボランティアは暇な人がするもの」「無償でやっているからやる気がない」などの偏見が存在します。わたしもボランティアに参加するまでそう思っていました。

中学1年の夏休み、わたしは知り合いからイベントのボランティアに参加して欲しくないか、

と誘われました。やるかやらないか迷いながらも知り合いがいるという心強さから友達と一緒に参加しました。

初めはどうすればいいのか何も分からず、とても不安でした。しかし、一緒に看板等のデザインを考えたり、塗装や制作をやっていったりするにつれ、他の参加者とも話せるようになりました。そして段々と活動が楽しくなってきました。朝から夜まで作業が続いたり、重労働もあったりと、少し大変なこともありましたが、楽しみながら完成へと近づいている状況にすごくワクワクしていました。完成したら町の人達や子供達は喜んでくれるかな？楽しんでくれるかな？などと考えながら、みんなでゴールを目指すのは新鮮な感覚でした。

しかし、その年のイベントは延期になってしまいました。頑張って作ったものが全てボツになってしまうかもしれないという悲しさと、いつ行われるのか分からない不安とがある中、イベントが開催されるまでの期間、もっと良くするために準備を続けました。結果的にイベントは秋に開催され、小学生や地域の人達が集まり、楽しそうにしてくれていました。開催できたことと、最後までやり遂げたことに喜びを感じました。このボランティアに参加して地域の人との関わりが増え、地域の人と関わる楽しさも知りました。

わたしは、その年から今まで同じイベントのボランティアを続けています。毎年内容が変わること、人手の問題など、イベントを開催する難しさと、大変さも経験しました。その中で気付いたことがあります。ボランティアに参加するまで、ボランティアをやっている人は暇なのかと思っていました。しかし、本当は、イベントを成功させるために頑張りたい人や、地域の方々との関わりを大事にしたいと思っている人が集まっているということです。また、ボランティアに参加することで人と関わることの大切さ、人と関わることでしか得られないもの、人のために頑張るといふ喜びと大変さを学びました。

わたしは現在、稲取高校でレスリング部のマ

ネージャーをしています。レスリングという競技を部活として扱っている高校が少なく、珍しいものだと思います。だからこそわたしはレスリングという競技に興味を持ち、レスリング部のマネージャーになりました。普段はマットの清掃や洗濯物、飲み物の用意、タイマーのセットなど、選手が集中して練習に取り組めるような環境を整えています。掃除などを毎日続けるのは大変ですが、選手にいい記録を残してもらいたいと思い頑張っています。ときどきですが、選手たちと一緒に筋トレや、ストレッチ、マット運動なども行っています。マット運動は難しくなかなか出来ない技もありますが、少しずつできるようになってきました。今はヘッドスプリングに挑戦中です。

大会では先生方と共に運営に協力しています。試合のタイマー、判定を確認するためのビデオ撮影、結果を本部に届ける仕事等があります。他校のマネージャーも仕事を一緒にする仲間です。普段の練習の様子や、大変なことを話して笑い合ったり、やり方がわからないところなどを教えあったり、みんなで仲良く活動しています。他校の選手とも交流があります。静岡県の高校はレスリング部全員で夏と冬に合宿をします。たくさんの選手たちと関わり、他校であっても応援しあえる仲です。

稲取高校レスリング部は昔から強く、今年も全国大会に出場しました。OBの方も頻繁に練習に参加し、選手に技を教えてくれています。みんなが頑張っている姿を見ながら、選手全員で全国大会に出場という願いのため、わたしも日々活動しています。

わたしは人と関わるのが好きです。そして誰かのために頑張ることも好きです。レスリング部のマネージャーにもやりがいを感じています。そしてこれからも、大人になっても人と関わり、誰かのために頑張るといふことを自ら実行し、この町が好きなのために、わたし自身のためにも、たくさん地域の人と関わり、大好きな故郷を盛り上げられるよう頑張っていきたいなと思います。また、ボランティア活動を通して学んだことをこれからも忘れず大切に、

活動を続けていきたいです。



柔道で学んだこと

下田高等学校1年 田代 龍輝

私は幼稚園の頃から現在まで、11年間柔道を続けています。柔道には魅力がたくさんありますが、その中で特に大切だと感じたことが「礼儀」です。

私は小学校六年生の時、大会で優勝しました。勝てると思っていた相手だったので、とても嬉しく、勝った瞬間、思わずガッツポーズが出ました。その光景を「礼儀」という視点で思い出したのは、中学二年生の時です。

私は、オリンピックで二連覇を達成した、七三キロ級の^大野将平選手を尊敬しています。大野選手の試合は、他の選手と比べて見応えがあります。特に内股と巴投げはキレがすごく、迫力があります。私は一時期、大野選手の内股に憧れて練習していたので、試合の動画をよく見ていました。そんな中、私が中学二年生の時に、大野選手が

「悔しがっている相手に対してこちらが喜ぶのは、その相手に悔しさ以外の余計な感情を芽生えさせるかもしれない」

と話しているインタビューを目にしました。

思い出してみると、大野選手は、試合で勝っても、礼をするまでは感情を表に出しません。二連覇がかかった東京オリンピックの試合でさえ、礼をするまでは感情を抑え、監督のところに行って初めて笑顔を見せていました。

この言葉を聞いて、私は、自分が礼をする前

に、ガッツポーズをしたことを思い出しました。そして、あの時のガッツポーズは、悔しさ以外の余計な感情を芽生えさせてしまったのではないか、リスペクトが欠けていたのではないか、相手に対してとても失礼なことをしたのではないか、と思いました。

競技によってガッツポーズは、パフォーマンスのような意味もあり、相手や自分を鼓舞するために役立つこともあります。ですが柔道は、礼で始まり礼で終わる「武道」です。そのため相手を尊重し「礼儀」を大切にする姿勢が重要になります。そして、そのような意識は、とっさの時に行動となって表れます。そのことに気づいてからは、「日頃から周りに気を配り、心を鍛える」ことを意識して生活するようになってきました。

まず取り組んできたのは、相手に対して感謝の気持ちを伝えることです。どんなに小さいことでも「ありがとう」と言葉にするようになってきました。授業中も、授業を受けることを当たり前と思わず、先生に対して敬意を持ち、真剣に取り組みました。次に、適切な言葉遣いも心掛けてきました。特に目上の人に対しては、必ず敬語を使うようになってきました。また、相手の意見に真剣に耳を傾ける姿勢を持つことも大切になってきました。そのため、友達や後輩や、自分と違う意見であっても、話を真剣に聞いて、感謝の気持ちを忘れずに接してきました。

このような意識を日頃から積み重ねることで、自然と相手を思いやる姿勢が身に付き、「礼儀」という「心」と「行動」につながると思います。

さらに、この「礼儀」は、社会人になってからも大切に欠かせないものだと考えます。どのような職種であっても、仕事をする時は、他者とのコミュニケーションを取り、人間関係を築くことが重要になります。コミュニケーションをとる際に、感謝の言葉や、適切な言葉遣い、相手の意見に耳を傾ける姿勢があれば、相手との信頼関係を築くことにつながります。柔道の場だけでなく、日常生活の中で礼儀を意識して、自分の成長や将来に繋げていきたいと思っています。

私には今、目標が二つあります。柔道で県大会優勝すること、体育の先生になることです。そのためには、まだまだやらなければならないことがたくさんあると思います。私は今まで、柔道を通して様々な大切なことに気づき、多くのことを学んできました。今後も、日頃の積み重ねを大切に、柔道を通して大きく成長していきたいです。そして、2年後県大会で優勝した時に、感情を抑えて礼をし、その後に喜ぶ姿を見せられたらいいなと思います。



歴代発表者（青少年主張発表大会）

回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
学校名	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	
小学生	大川小学校 5年	稲葉 賢史	後藤 麻衣子	鎮田 泰代	稲葉 恭子	内藤 晴之
	大川小学校 6年	飯田 瑞穂子	稲葉 美穂子	稲葉 隆行	稲葉 早千江	飯田 めぐみ
	熱川小学校 5年	小林 千枝	鈴木 理史	川上 竜司	木村 昌弘	藤井 愛
	熱川小学校 6年	井原 みゆき	森田 綾	島田 浩充	濱野 剛稔	横山 あかね
	稲取小学校 5年	村木 町子	山田 亜矢子	奈良 有希子	石井 夏菜	雲野 多恵
	稲取小学校 6年	加藤 郁美	鈴木 美恵子	渡辺 宏	村木 美輝	内藤 美奈子
中学生	熱川中学校 1年	嶋田 千穂	飯田 瑞穂子	加藤 久美子	加藤 友美	小林 浩一
	熱川中学校 2年	土屋 いづみ	兼子 まや	飯田 瑞穂子	稲葉 るみ子	加藤 友美
	熱川中学校 3年	前田 慶子	及川 智恵	稲葉 真紀	児島 涼子	稲葉 美穂子
	稲取中学校 1年	鈴木 有美子	福岡 慈子	金指 直子	田原 竜也	太田 雅也
	稲取中学校 2年	山田 幸二	滝 裕子	福岡 慈子	渡辺 奈穂子	田山 麻理絵
	稲取中学校 3年	堀川 泰代	滝 悦子	平田 洋子	石原 尚子	古屋 桃子
高校生	稲取高等学校	松山 美加	田原 俊介	和田 めぐみ	鈴木 活生	庄司 好男
					土屋 時乃	遠藤 智美
	下田南高等学校					鳥沢 たまき
	伊東城ヶ崎高等学校				大内 佳人	雄谷 隆夫
						三浦 周一郎
	下田北高等学校			鈴木 参日	辻 由美子	加藤 正剛
	下田南(定時制)					
伊東商業高等学校						
伊東高等学校						

回数	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	
学校名	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	
小学生	大川小学校5年	木村 直樹	稲葉 世里子	稲葉 健太	飯田 多賀乃	横山 美和
	大川小学校6年	飯田 剛弘	木村 和加子	山下 優子	飯田 洋一	片山 房子
	熱川小学校5年	山本 稚奈	木村 奈津子	小林 真瑛	田神 敬祐	坂田 菜穂子
	熱川小学校6年	木村 明人	戸田 景子	木村 浩子	高羽 さやか	太田 恵子
	稲取小学校5年	伊東 久恵	鈴木 智和	山田 美保子	鈴木 精一郎	内山 亜紀子
	稲取小学校6年	垂井 幸	桑原 加奈子	横山 真理	太田 博之	小池 正治
中学生	熱川中学校1年	不二山 千晴	溝尾 祐	不二山 仁美	野澤 留実	鈴木 美菜
	熱川中学校2年	土屋 はるか	金指 亮太	豊島 真美	鈴木 佑理	野澤 留実
	熱川中学校3年	秋永 美絵	鎮田 泰代	飯田 留美	島田 深志	山本 稚奈
	稲取中学校1年	内藤 夕子	小知和 寛子	篠田 知子	鈴木 未奈	古屋 彩花
	稲取中学校2年	鈴木 照子	斎藤 立枝	小知和 寛子	花田 知子	遠藤 裕美
	稲取中学校3年	田原 竜也	宮原 崇敏	金指 貴子	山田 恵梨子	坂部 千秋
高校生	稲取高等学校	勝間田 秀寿	鈴木 一繁	飯田 仁美	高村 幸邦	飯田 剛弘
		前田 朝子				
	下田南高等学校	石原 尚子				
	伊東城ヶ崎高等学校				土屋 富浩	前野 智恵子
	下田北高等学校				飯田 ひとみ	小知和 寛子
						飯田 めぐみ
	下田南(定時制)					
伊東商業高等学校						
伊東高等学校						

回数	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回	
学校名	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	
小学生	大川小学校5年	湯川 貴喜	稲葉 由莉	西尾 雅輝	木村 高德	
	大川小学校6年	岡田 真美	稲葉 愛美	稲葉 由莉	星野 健作	山本 茜
	熱川小学校5年	中島 亜希子	石森 千春	坂田 佳之	秋永 知南	
	熱川小学校6年	横山 隆志	湊 渉子	相沢 祐樹	山岸 みづ紀	山本 紗弓
	稲取小学校5年	小野 仁実	米澤 亜弥	佐藤 翠	富岡 加織	
	稲取小学校6年	村山 恵美	富岡 志穂美	栗田 里美	内山 浩美	鈴木 友里子
中学生	熱川中学校1年	飯田 多賀乃	土屋 美和	山本 力道	久野 麻紀	
	熱川中学校2年	稲葉 健太	飯田 多賀乃	横山 宏美	曾我 真奈美	森田 みなみ
	熱川中学校3年	嶋田 早紀子	鈴木 美菜	乗松 宏衣	河内 孝樹	佐藤 香里
	稲取中学校1年	遠藤 有希子	石垣 ちさと	佐藤 栄美	金指 令枝	内山 浩美
	稲取中学校2年	稲葉 いづみ	山口 宏美	上嶋 麻衣子	村木 貴	
	稲取中学校3年	桑原 敦子	秋田 真澄	清水 高明	古屋 明日花	村木 貴
高校生	稲取高等学校	村木 さやか	須藤 裕美	鈴木 梓	土屋 晋	村上 ゆりこ
	下田南高等学校	金指 純子	内山 加奈子	前田 美佐子	鈴木 千絵	
	伊東城ヶ崎高等学校			田中 有希子	五十嵐 広行 高橋 真未	鈴木 愛理
	下田北高等学校	濱野 友加 内山 太恵子	脇田 春啓	野澤 幸恵	湊 浩子	平川 城太郎
	下田南(定時制)	市川 容子	太田 梓			
	伊東商業高等学校	土屋 健一	高橋 映年	横山 麻子	稲葉 留美	
	伊東高等学校				横山 綾子	米沢 知紘

回数	第16回	第17回	第18回	第19回	第20回	
学校名	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	
小学生	大川小学校 5年					
	大川小学校 6年	歌田 裕美	稲葉 啓太郎	木村 美穂	木村 佳奈美	稲葉 拓人
	熱川小学校 5年					
	熱川小学校 6年	伊藤 梨紗	中村 賢哉	京極 雄大	岩間 康平	中村 駿介
	稲取小学校 5年					
	稲取小学校 6年	芹澤 美沙	遠藤 悠子	内山 颯子	鈴木 里咲	山田 瑞季
中学生	熱川中学校 1年					
	熱川中学校 2年	梅原 千種	石川 泰希	稲葉 寛美	山本 彩香	高崎 頼
	熱川中学校 3年	石森 千春	前田 友美	山本 茜	飯田 龍仁	鈴木 雅晃
	稲取中学校 1年					
	稲取中学校 2年	中山 美穂	本田 璃菜	八木 厚子	上嶋 紗也加	齊藤 佳穂
	稲取中学校 3年	黒田 祐介	内山 浩美	鈴木 宏規	石井 三香子	本田 華菜
高校生	稲取高等学校	野口 花菜	小野澤 宏太	菊地 恵	鈴木 俊太	土屋 奈菜
	下田南高等学校		山田 佐世		平井 里奈	村上 麻実
	伊東城ヶ崎高等学校	佐々木 草平	遠藤 あゆみ	太田 裕介	石塚 里沙	星野 千秋
	下田北高等学校	富岡 志穂美	村木 かおり	鈴木 成禎	飯田 宗一郎	千葉 崇幸
	下田南(定時制)					
	伊東商業高等学校		森田 有希子	富田 さち	前田 尚也	新居 功
	伊東高等学校	太田 美佐	金作 美紀	遠藤 央恵	佐藤 舞	秋永 亮

回数	第21回	第22回	第23回	第24回	第25回	
学校名	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	
小学生	大川小学校 5年					
	大川小学校 6年	木村 慎太郎	稲葉 大樹	石井 圭介	飯田 夕稀	後藤 隼希
	熱川小学校 5年					
	熱川小学校 6年	鈴木 亜実	大兼 ことみ	八木 梨紗	渡邊 里奈	中村 萌
	稲取小学校 5年					
	稲取小学校 6年	石井 輝	鈴木 結稀	米澤 茜	村木 恭二	盆子原 茜音
中学生	熱川中学校 1年					
	熱川中学校 2年	加藤 郁美	黒田 訓英	有賀 伊久磨	大兼 ことみ	八木 梨紗
	熱川中学校 3年	市川 加菜	富樫 貴史	石井 光晴	小澤 翔太	木村 沙枝美
	稲取中学校 1年				米澤 茜	大塩 朝加
	稲取中学校 2年	塙 麻祐子	鳥沢 香純	宮崎 恵里奈		
	稲取中学校 3年	森下 泰羽	山田 茉莉花	安森 沙耶	安部 尊諠	田村 彩
高校生	稲取高等学校	梅原 麻美	岩崎 里音	竹内 遥香	前川 美悠	大鳥 瑞希
	下田南高等学校	高村 和	上島 麻実			
	伊東城ヶ崎高等学校	宍戸 沙耶香				
	下田北高等学校	山田 晴美	山田 剛史	横山 美紀		
	伊東高等学校城ヶ崎分校		早瀬 明日香	森 正代	篠澤 勇志	土屋あゆみ
	伊東商業学校	太田 侑紀		中山 瑛里	吉田 美沙	
	伊東高等学校	横倉 園枝	中村 歩美	釜田 みずき	滝口 汐利	山田 美智子
	下田高等学校				相良 龍太郎	石井 利枝

回数	第26回	第27回	第28回	第29回	第30回	
学校名	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年	石井 拓也	稲葉 陶真	飯田 咲喜	石井 那於	飯田 大喜
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	加藤 博己	土屋 花音	田村 伊織	嶋田 翔太郎	鳥澤 侑生
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	高橋 大地	藤邊 光源	佐久間 祐也	太田 翔夢	梅原 千裕
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年	萩原 歩美	石井 奈菜子	臼井 裕貴	岩崎 航大	篠原 陽
	熱川中学校3年	穴澤 なな子	飯田 夕稀	稲葉 義充	森 萌香	茂木 優紀
	稲取中学校1年	鈴木 絢子	村木 亜未香	稲葉 亜汐	鈴木 琢也	齋藤 陸
	稲取中学校2年					
	稲取中学校3年	宮崎 玲唯奈	太田 和希	山田 さくら	鈴木 綾乃	千葉 優寿花
高校生	稲取高等学校	阿部 佳澄	竜田 匠	上柳 希	中嶋 美幸	西田 翔
	伊東高等学校 城ヶ崎分校	川合 清香	穴澤 なな子	加藤 美里	佐藤 恭子	小野 あいり
	伊東商業 高等学校	奥村 美咲	木村 遥	木村 円香	加藤 百夏	石井 茉夕子
	伊東高等学校			土屋 かおる	日下 拳	
	下田高等学校	村木 由仁	横山 蓮	山本 伊万里		相澤 蘭
一般						

回数	第31回	第32回	第33回	第34回	第35回	
学校名	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	
小学生	大川小学校5年					
	大川小学校6年	茂木 洋輔	木村 優太	柚田 唯生		
	熱川小学校5年					
	熱川小学校6年	亀浦 ももか	工藤 真帆	土屋 慶音	稲葉 佳丈	高羽 雄大
	稲取小学校5年					
	稲取小学校6年	強谷 菜々美	八代 隆世	黒田 ゆき	鈴木 尚	飯田 凜音
中学生	熱川中学校1年					
	熱川中学校2年	常盤 大聖	長谷川 珠里	山本 晃己	木村 優太	
	熱川中学校3年	富田 夏帆	小柳 李菜	内山 結愛	藤井 菜々美	稲葉 理桜
	稲取中学校1年	内山 世那	宮下 且	内山 桃華	鈴木 泰晴	鈴木 友菜
	稲取中学校2年					
	稲取中学校3年	山田 朝陽	村木 美憂	清水 悠加	前田 晃佑	井口 恋来
高校生	稲取高等学校	山本 瑠夏	菊池 和磨	前田 雄太郎	佐藤 南星	山本 大翔
	伊東高等学校 城ヶ崎分校	青山 今日子	小川 奈々	佐藤 彩音	太田 あゆみ	
	伊東商業 高等学校	山田 真治郎				
	伊東高等学校	稲葉 夕夏		齋藤 那希		
	下田高等学校	西田 亜美	川端 綾	米澤 凜夏	高羽 隆生	山田 龍道
一般					本多 まゆみ	

回数	第36回	第37回	第38回	第39回	
学校名	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	
小学生	大川小学校5年				
	大川小学校6年				
	熱川小学校5年				
	熱川小学校6年	木村 真緒	野口 はな	木田 真奈羽	笠井 舞花
	稲取小学校5年				
	稲取小学校6年	山田 薫生	鈴木 凜	鈴木 莉音	嘉瀬 琴葉
中学生	熱川中学校1年				
	熱川中学校2年				
	熱川中学校3年	木村 侑和	生田目 朱莉	梶野 強	船山 明日香
	稲取中学校1年				
	稲取中学校2年				
	稲取中学校3年	石井 六花	田村 悠華	鈴木 奈都菜	藤邊 妙果
高校生	稲取高等学校	前田 瑠花	米澤 ゆず	八代 勇渡	山崎 莉々亜
	伊東高等学校 城ヶ崎分校				
	伊東商業 高等学校	宮下 耀	竹内 楓	山本 ゆりか	
	伊東高等学校			清水 朝成	
	下田高等学校	田村 豪人	横山 海斗	進藤 寧緒	田代 龍輝
一般		高瀬 真由			

編集・発行

第39回 東伊豆町青少年主張発表大会文集

東伊豆町 教育委員会事務局 社会教育係

TEL：0557-95-6206

FAX：0557-95-5691